

明日の社会を創造する力を育む小学校社会科授業

～地域教材の活用を通して～

伊奈町立南小学校 教諭 金子 恵美

I はじめに～今、子供たちに求められる力～

今、子供たちには、社会に通用する力として、自ら社会参画する資質や能力が求められている。

現代は、コロナ禍や国際情勢など、先行きが見えない不安定な世の中でもある。このような社会だからこそ、一人一人が受け身の存在ではなく、社会の形成者として、自ら主体的に判断し、他者と関わりながら課題を解決できる人材の育成が重要視される。未来を担う子供たちが、自らの手でよりよい社会を創ることができるよう、現状を悲観するのではなく、明るい展望（未来への期待）をもたせることに、社会科教育の意義や責任がある。

学習指導要領においても、「社会との関わりを意識して、課題を追求したり解決したりする活動」の充実が重視されている。社会科は、「現代の社会」を学び、「今後の社会」を考える教科である。「現在」の社会をふまえ、子供たちが活躍する「将来」を見据えた授業づくりが不可欠である。そのため、小学校の段階から「地域社会に対する誇りと愛情」「地域社会の一員としての自覚」などをしっかりと身に付けさせたい。

小学校の社会科の授業では、地域に目を向けさせることを重視し、いかに自分事として、身近に感じさせるかという点が必要である。特に、自分の住む市区町村の課題を知り、行政や住民がどのような課題意識をもって生きていくべきかを考え、地域の人に自分たちの考えを伝える、といった社会とつながった授業や活動をイメージさせたい。

本研究では、持続可能な社会づくりのため、社会の形成者として必要な力を、「人間力」「社会力」と設定している。

「人間力」＝積極的に社会に参画し、課題を見付ける能力
「社会力」＝課題を克服し、社会をよりよく変えていこうとする能力

この力を高め、「社会の一員としての自覚」を身に付けさせることで、主体的に社会参画できる人間の育成を図っていく。児童の人間力や社会力を高めるために、次のような研究の仮説を立てた。

研究仮説 『地域とのつながりを意識させた魅力ある授業を展開すれば、主体的に学ぶ児童を育成し、社会を創造する力を高められるだろう。』

II 研究のねらい～実践を通して高めたい力～

社会科においては、「つながり」を意識した指導が必要である。各単元の関連性、地域への参加意識、上学年や上級学校への引継ぎなど、常につながりを意識し、系統性をもたせることが大切である。学習内容を単発で終わらせずに、他の事象へのつながりを意識させることで、「わかる授業」や「学ぶ喜び」につなげていく。

1 人間力・社会力を高めるために

児童の発達の段階に応じて、徐々に自覚を深めていくことが大切である。小・中学校の義務教育9年間を終えて、いずれ社会に出る時に、自分たちが新しい社会の担い手となる希望に満ちて、社会にできることのできる児童を育成していきたい。

2 小学校・中学校のつながりを大切に

次のことを念頭に、学年の発達の段階に応じた授業を展開することで、児童の人間力・社会力を高めていく。

(1) 小学校（基礎を身に付ける）

表1

1・2年生 「生活科」	「生活」（身の回りのこと）を学習させる。 （家庭での生活、身の回りのこと）
3年生初めて の「社会科」	「社会」（世の中のしくみ）を学び、どう地域社会に参画するかを学習させる。（伊奈町を中心に）
4年生 「社会科」	「社会」の広がり・つながりを意識させる。 （埼玉県に広げて）
5年生 「社会科」	「社会」の課題を捉え、どう解決するか主体的に学習させる。（日本全体まで視野を広げ捉えさせる）
6年生 「社会科」	「社会」とのつながりを考え、よりよい社会のためにどうするかを学習させる。（他国とのつながりでも考えさせる）

(2) 中学校（基礎をもとに社会に出る準備をする）

将来、自分たちがどんな社会を、どう創るか。

(3) 社会人（「人間力」「社会力」の実現）＝社会の形成者

3 求める力を児童の立場で言い換える

社会科が求める資質・能力の三つの柱を、児童に伝わる表現で常に意識させる。

○「知識・技能」→「知る」（新しいことを）

○「思考・判断・表現」→「考える」（どうすればよいか）

○「主体的に学ぶ力」→「変える」（世の中を）

児童には、『社会科の学習は、将来のよりよい社会を自分の手で創るために、新しいことを知り、どうすればよいかを考える学習』と常に伝えていく。

III 見通しと展開（何を意識させるのか）

1 系統性をもたせた指導「タテのつながり」

前述のとおり、授業者が意識し、児童に意識させるのは、発達の段階に応じたタテのつながりである。生活科の学習は3年生以上の社会科に、3年生の学習は4年生に、小学校は中学校に、そして社会科の学習は将来の社会参画につながる、という意識を高めることが大切である。

2 自分を取り巻く世界観「ヨコの広がり」

上記のタテのつながりは、年度や時期を経て達成される。同時に、教室の授業を、現在の自分の生活へ広げさせる。すなわち、学校・家庭・地域を見据えた視点での授業が大切である。例えば、

- (1) 個人：地域について関心をもつ、参加する
 - (2) 家庭：節水・ごみの分別・防災対策
 - (3) 地域：祭り・消防団の活動・防災訓練への参加
- 現在のこれらの活動が、将来の選挙権の行使・仕事に就く・イベントや行事を企画し実行する、つまり、社会に参加することにつながると理解させる。

3 主体的に学ぶためのアイテム(人・物・街)

地域に関連して「人」と「物」と「街」が大切である。どの単元でも、どんな教材でも、この三つの要素は必ず入ってくる。どれだけ収集・開発・活用できるか、授業者の役割は大きい。

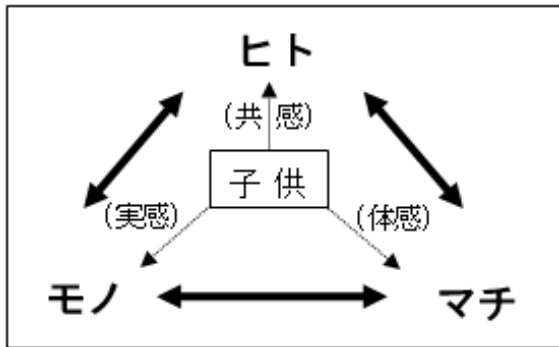


図1【子供を取り巻く人・物・街の関連】

(1) 「モノ」(物) を実感させる

教室に持ち込む実物の効果は大きい。

例：水(利根川)・水(「埼玉のおいしい水」)
梨(伊奈町産)・梨ジャム・梨ワイン、等々

(2) 「ヒト」(人) に共感させる

生き方を想像し、その苦労や悩みに共感させることで、社会を創ってきた先人や現代の大人たちに習う。現在、今後の自分自身の役割と重ねて考えさせたい。

例：梨農家・消防士・伊奈忠次・伊澤弥惣兵衛

(3) 「マチ」(街) を体感させる

地域での生活を感じる資料は無数にある。児童自身が収集してくればいっそう効果的である。

例：地図・写真・パンフレット・商品のラベル・ゆるキャラ関連のグッズなど

IV 実践例

1 『農家の仕事』(3年生)

3年生の学習内容「働く人とわたしたちの暮らし」の単元に「農家の仕事」がある。伊奈町の副読本では、町の特産でもある「梨づくり」が取り上げられている。この単元では、梨のつくり方を教える(学ぶ)のではなく、梨という「モノ」を題材に、農家の「ヒト」の仕事を理解し、「マチ」の特産である梨づくりを、社会全体の目でとらえさせたい。

(1) 教室に用意したモノ・ヒト・マチ

教材を、児童の身近に引き寄せる効果がある。

①教室に用意したモノ(購入・収集)

- 梨の果実 ○梨ワイン ○梨ジャム ○チラシ
- 梨のマドレーヌ(写真1)

②単元に関わるヒト(コメント・写真)

- 梨農家 ○選果場で働く人 ○買う人

③具体的な場所であるマチ(地図・画像)

- 梨畑 ○選果場 ○直売所 ○販売店(写真2)

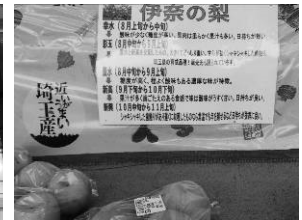


写真1(伊奈町の梨を使った菓子) 写真2(伊奈町で生産・販売の梨)
※購入し、店の写真と共に教室に用意した。児童の関心が高まった。

(2) 発問(単元を通して児童に問いかけたいのは)

『梨づくりは誰のためなのか』という発問により、梨をつくるのは農家でも、流通においては他の多くの人が関わっていることに気付かせ、つながりを考えさせる。

- ①作る人=勤労の喜び・収入・生産の向上
- ②扱う人=選果場や直売所、加工工場など
- ③売る人=流通・保管や販売の工夫
- ④買う人=大人、家族、自分
- ⑤食べる人=喜び、地域への貢献

【力を伸ばすための手立て】①

つながりを意識させる

学習の内容は、梨づくりの工夫や地域との関連である。同時に、児童自身が消費者として梨の流通の担い手であることも学ぶ。消費者としての「需要」が梨の生産を支えていることに気付かせ、自分たちの生活が、社会とつながっていることを学べる単元である。

身近な教材を通して、自分たちが社会に参画している=社会を形成する一員であることに初めて気付く。自分がマチとモノとヒトと関わる中から、自分の生活と社会の結び付きに気付かせることで、社会のために何ができるかを考えさせるステップとなる。

2 『火事からくらしを守る』(3年生)

3年生の「くらしを守る」の単元では、消防署に

ついて学習し、消防署見学を行う。4月当初からの、授業のつながりを意識させた計画を立てることが必要な学習である。

(1) 学習の系統

① 地図記号の学習(4月)

マチに何があるのか。(消防署・警察署・役場)

② フィールドワーク(5月)

消火栓・消火器・防火水槽などの存在に気付く。

③ ハザードマップ(6月)

地図を見て、自分の学校や住宅の危険度を知り、日ごろから防災を意識した生活をさせる。

④ 消防署見学(9月)

消防署で消防設備や車を見学し、話を聞く。

⑤ 学習のまとめ・振り返り(10月)

自分たちの町を守るとはどういうことか、自分自身にできることは何かを考える。

⑥ 4年生での防災の学習につなげる。

(2) 消防士からのコメント

児童の質問に回答した消防士のコメントを紹介する。「火事は怖いですか?」の質問に「怖いです。何一つ同じ現場はありません。何年経験しても怖さは変わりません。」また、「つらいことは?」に対して「人命救助に行ったにも関わらず、救えなかった命があることです。」など、本音の部分が語られている。「火事は怖くない。つらいこともない。」と答えるようなヒーロー像を予想する児童もいる。しかし回答は、一人の人間らしく、自身の仕事に真剣に打ち込む職業人の姿そのものであった。だからこそ「住民の命や生活を守る」という高尚な意識が伝わる。

【力を伸ばすための手立て】②

人間の本質に迫る

社会科の授業には、必ず「人」の姿がある。単なる教材を超えて、身近に生きている人のナマの声を聞くような対話的な学習で、学びを深める学習は効果的である。現在の社会を守ってくれている人が身近にいて、その社会を受け継ぎ、よりよい新しい社会を築くという意識がいつそう高まると考えられる。

消防士の仕事や意識、梨づくり農家の苦労や工夫など、3年生で、人の姿を意識した学習を行うことで、4年生の先人(伊奈忠次・井澤弥惣兵衛)の智恵や功績を学ぶ学習にもつながっていく。

3 『水はどこから』(4年生)

4年生の「住みよいくらしをつくる」の単位では、水が送られてくる仕組みを学習する。水道の蛇口を

ひねれば水が出てくることは、児童にとって当たり前のことである。しかし、その水は、自分の暮らしからはるかに離れた山に降った雨が、ダムを通り川を下って浄水場でろ過され水道管を通ってやってくると知った時の驚きは大きい。この単元の学習で児童は、素直に「水を大切にすること」が社会の改善につながると意識できるのである。

(1) 3本のペットボトルを用意する

① 市販のミネラルウォーター

② 学校の水道水

③ 利根川でくんだ水(写真3)

※市販の水を買わなくても、水道から飲める水が出てくる。伊奈町の水道水は、もとは利根川水系の川の水であることを知る。

(2) 浄水場とダム

① 「ダムマニア」という言葉(ダムの役割・魅力)

② 「ダムカード」の発行(細かい情報)

③ 「ダムカレー」で地域との密着

※ダムの役割に注目し、なぜダムは人を引き付ける魅力があるのか、県内のダムを訪れて資料を集めた。各地のダムはダムカード(写真4)を発行し、来場者に無料で配布している。また、ダムカレーの、ダムをイメージした食材や形(例:滝沢ダムに至るループ橋をイメージしたリングフライ、下久保ダムの角ばった壁面に似せ四角く盛った飯、等)を紹介する。



写真3(利根川の水を取る)



写真4(ダムカード)

ダムの学習は、山奥に人知れず巨大な建造物があることで、我々の暮らしが守られている(飲料水の確保、洪水の予防、発電などの活用)という驚きを呼ぶ。

【力を伸ばすための手立て】③

当たり前を驚きに変える

生活の中の当たり前が、当たり前ではないと知り、そこに「人」の姿があり、その苦労や工夫に気付いた時、驚きが変わる。一杯の水を大切にするという身近な所から社会を変える意識を育成することは、環境学習や、SDGsにもつながる。

4 『伝統・文化・先人—伊奈忠次』(4年生)

町名の由来となった「伊奈氏」であるが、児童はどんな人物なのかを知らない。授業で、伊奈町の発展に尽くした忠次の功績について学習することで、郷

土に誇りをもたせる。

(1)伊奈忠次について(町内の伊奈氏関連のモノ)

- 屋敷跡 ○レキシまつり ○キャラクターグッズ
- ポスター ○ラベル ○墓 ○ラッピングバス
- ホームページ ○冊子 ○忠次音頭

副読本にも、伊奈氏の墓が紹介されているが、授業者が現地で撮ってきた写真には、説得力が加わる。



写真5 (鴻巣・勝願寺の墓)



写真6 (伊奈・願成寺の墓)

「身近に感じることができる偉人」である。児童は、授業前はそんなことは知らない。忠次は、令和5年の大河ドラマに取り上げられた徳川家康の重臣で、関東開発に深く関わり、ドラマにも登場した。伊奈氏の大きな功績は、利根川の東遷・荒川の西遷であり、現在の私たちの生活にも関わっている。

(2)指導の工夫

ア 資料(写真)を集める

学校近くの「伊奈氏屋敷跡」の写真を見せる。学校から歩ける範囲で、しかも見慣れた街並みの中に、広大な面積を持った屋敷跡があることに児童は驚く。その構えは、一つの城の様相を呈しており、伊奈氏の力の大きさがうかがえる。

イ 教材を集める教師の苦労話

羽生にあった忠次の銅像が加須に移されたことを聞き、調べ探し当てて、撮影することができた。



写真7 (伊奈町の伊奈氏屋敷跡)



写真8 (加須市の忠次の像)

【力を伸ばすための手立て】④

地域に誇りをもたせる

伊奈町や関東の発展に伊奈氏の功績があったことを学ぶことで、地域への誇りと愛情を育てることができる。今、住んでいる地域が、どうしてあるのか理解することで、「今後、自分たちはどうすればよいのか」と、継承し発展させようとする意識を育てることができる。

5 『伝統・文化・先人—井澤弥惣兵衛』(4年生)

伊奈忠次から160年後、埼玉県の見沼の開発に携わったのが井澤弥惣兵衛である。書物やインターネットだけでなく、実際に現地を訪問してみると気

付くことがたくさんある。見沼の開発に携わった弥惣兵衛の資料集めは、「行ってみないと分からない、行ってみて初めて分かる」ことがたくさんあった。その感動を、子供たちと共有できる授業を構築するように計画した。

(1)弥惣兵衛の功績を巡って

①柴山伏越(白岡市)と墓(白岡市・常福寺)

元荒川の下を見沼代用水がくぐる伏越(写真9)は、現在はコンクリート仕様になっているが、見ることができる。現地に行ってみると、伏越の真横に、弥惣兵衛の墓(写真10)があった。看板には没後30年経って、地域の人の願いによって、東京より分骨されたと書いてある。今も残る、伏越でくぐる見沼代用水を見守るかのように墓はたたずんでいることに、児童も感動していた。



写真9 (現在の柴山・伏越)



写真10 (弥惣兵衛の墓)

②記念碑(さいたま市・万年寺)

副読本にも載っているが、万年寺には弥惣兵衛をたたえる石碑(写真11)があるとのことで行ってみると、この寺は、見沼代用水の工事の際に事務所が置かれたことにちなんでいることが分かった。弥惣兵衛の没後80年が経ち、地域の人で建てた石碑とのことである。碑文の漢字(写真12)を何とか読んでみると、「新田開発」「徳を仰ぎ」「水難無」「豊穰」の文字が読み取れる。見沼代用水によって土地が豊かになった見沼の人々が、弥惣兵衛の功績に感謝し建てた碑であることがわかる。児童も『昔の人々の感謝の声が聞こえるみたいだ』と発言していた。



写真11 (石碑)



写真12 (碑文の文字の一部)

水難無
豊穰

③弥惣兵衛の銅像(さいたま市・見沼公園)

この弥惣兵衛の銅像の写真(写真13)は、副読本にも掲載されている。さいたま市の見沼公園に行ってみると、たたずむ弥惣兵衛の銅像の視線の先には、

見沼公園の広場があり、多くの人が平和に遊んでいる。さらに、その先は見沼の田園地帯であり、見沼代用水が流れていく方向でもある。江戸時代の弥惣兵衛が、見沼のその後をも見守っているようである。銅像の傍らにある看板には、弥惣兵衛の署名と花押（写真14）が添えられていた。写真に撮って教室で紹介すると、『弥惣兵衛のサインだ』と子供たちの関心が大いに高まった。



写真13（見沼の地を見守る銅像） 写真14（看板の署名と花押）

④懸樋（上尾市）

上尾市・原市の懸樋は、もとは綾瀬川の上を木管で見沼代用水が越えるものであったが、その後レンガ造りとなって、現在は伏越に代わっている。それでも明治期まで使われたレンガ造りの懸樋の一部が残っている。横にある公園には、弥惣兵衛の功績や懸樋の変遷の写真などがパネルで紹介されている。

⑤見沼通船堀（さいたま市）

見沼通船堀は、弥惣兵衛が70歳を超えてからの事業である。授業では、『弥惣兵衛、最後の大仕事！』として取り扱った。「船が坂を上っていく」という発想は、授業者にとっても、もちろん児童にとっても驚くべきものであるが、実際に現地で見沼代用水と芝川の高差は想像以上であった。授業では、映像や写真、イラストで児童と一緒に通船堀のしくみを考えた。さいたま市には、再現された閘門式の水門が残っている。

(2)教材化

①ワークシート『やそべえの足跡をたどる』

弥惣兵衛の功績が分かる伏越・懸樋・通船堀・寺・石碑・銅像などを一枚の地図にまとめた。現在、どこに行けば何があるかを、子供たちが調べ、現地に行ったら何を見たいか、何を知りたいかなどを発表し合った。『昔の人の思いを知りたい』『今どうなっているか見てみたい』と意欲的に発言していた。授業後に、その地図をもとに、家の人と実際に訪れてきた児童もいる。

②『やそべえ物語を描いてみよう』

単元のまとめとして、弥惣兵衛の功績をマンガ形式でまとめる活動を行った。マンガ形式でまとめる良い点は、描く児童にとっては、

ア まとめるため、主体的に詳しく調べる。

- イ 絵にするため資料や図を細部まで見て理解する。
 - ウ 周りに見てもらうため、表現を工夫し、豊かな発想力を発揮する。……という点である。また他の児童の描いたマンガを交換したり配付したりして相互に鑑賞し合うことで、他の児童にとっても、
 - エ 自分が調べたのと同じ内容を、違う表現方法で確認することで、事象を再確認できる。
 - オ 自分では知らなかったり、気付かなかったりした弥惣兵衛の功績を知ることができる。
 - カ もっと調べてみたい、別の内容で描いてみたいという主体性が育つ。……という点がある。
- 実際に、自主的に2作品目を描いてきたり、自主学習で別の内容や人物でマンガ形式にまとめたりするなど、活動を児童なりに発展させ取り組む姿もあった。社会科に必要な「主体的な態度」「知識・技能」「思考・判断・表現」の力を高めることにつながる活動となった。



写真15（児童の前単元のまとめ） 写真16（児童の「やそべえ物語」）

【力を伸ばすための手立て】⑤

教材に命を吹き込む

伊奈忠次にしても井澤弥惣兵衛にしても、多大な功績を残した郷土が誇る偉人である。児童は、人物の功績を学び、自分たちが今、暮らしている郷土の発展に尽くしてくれた人々の姿に迫ることで、感謝し、自分たちが郷土を受け継いでいくという意識を高めることができる。同時に、歴史に名の残る有名人ばかりではなく、名は残らなくとも、今まで多くの人々によって築き上げられてきたのが、現在の社会であるということに気付かせることも大切である。

V まとめ～成果と考察

本研究では、主に小学校3・4年生の教材を取り上げて進めてきた。どの学年の学習も大切だが、特に3・4年生の段階を重要視したのは、「社会科」の学習が、子供と社会をつなぐ最初の扉となるからだ。3年生で初めて社会科を学ぶ児童は、その扉を開けたことにな

る。その段階の小学校3年生の児童たちが、『これから、自分たちが新しい社会を創るんだ』と考えるのは難しいであろう。だからこそ、発達の段階に応じて、学年を追って、小学校の高学年、中学校へとつなげていく指導が重要であると考えた。

そのために地域教材は、有効であった。小学校の「生活科」で家庭や身の回りの事を学習し、学年が進むにつれ、「社会科」で市町村→埼玉県→日本→世界と、視野を広げていく、その根本が自分の住む地域にあるのである。地域社会に参画することが、将来の社会の形成につながるという意識を高めることで、「積極的に社会に参画し、課題を見付ける能力(人間力)・「課題を克服し、社会をよりよく変えていこうとする能力(社会力)」の基礎を身に付けた児童を育成できている。

写真17
(自分の考えに自信をもって挙手する児童が増えた)



1 児童の変容

(1) 数値に見られる変容

表2 (「はい」と答えた人数) ※4年生3クラス89人

質問内容	R5年度一学期末
①社会科の学習は、好きですか。	94.1 %
②興味をもって、学習にのぞみましたか。	95.3 %
③今回の学習を、もっと学びたいですか。	91.8 %

(調査を重ねるごとに数値は上昇してきた。本年度の一学期末で、3項目とも9割以上となった。)

表3 (学期ごとの到達率)※確認テストによる3クラス平均

	一学期	二学期
知識・技能	80 %	89 %
思考力・判断力・表現力	71 %	86 %

(2) 児童による授業の振り返り

単元ごとに学習問題を設定し、単元のまとめとして問題に対する自分の考えをまとめる。「社会をよりよくするために、自分はどうすればよいか」という視点で考えることができる児童が増えてきている。「すごい」「えらい」「たいへんだ」「自分にはできない」という他人事ではなく、「自分ならこうする」「これからこうしたい」「他の人に広めたい」という「社会を変える」ことにつながる意見が多数を占めるようになってきている。(例『自然や地形を生かした埼玉のよさを知って、もっともつよい埼玉をつくっていききたいです。』『浄水場がきれいにした水を、私たちが大事に使えているかを考えることができた。きれいにした水を大切にしたい。』等)

2 研究の成果

地域教材には、児童生徒の「人間力」「社会力」を高める効果がある。そのための手立てとして、「IV 実践例」の各項目で触れた①～⑤を相互に関連させ、蓄積していくことで、効果は相乗的にアップする。

① つながりを意識させる

- ② 人間の本质に迫る
- ③ 当たり前を驚きに変える
- ④ 地域に誇りをもたせる
- ⑤ 教材に命を吹き込む

特に、①「つながりを意識させる」ことは、どの単元、どの学習についても必要である。授業中の「前にやった」「どこかで見た」「だからつながるんだ」という児童の反応は、つながりを実感した生の声であると考えられる。教師の「次はこれをやるよ」「この内容は、このあとの〇〇の学習でも出てくるからね」という働き掛けも大切である。

また、魅力ある授業を創造し、児童の「人間力」「社会力」を高めるためには、⑤「教材に命を吹き込む」視点が必要であると考えられる。現地に行ったり、写真や資料を集めたりして得た教師自身の感動や苦労を、資料と共に伝えると、児童の目の輝きが違う。「ネットにあがった写真だよ」と「昨日、先生が行って撮ってきた写真だよ」では反応が全く異なるし、行ったからこそ気付いた驚きを伝えることで、児童の思考力は高まっていく。

一個の梨、一滴の水、一枚の写真から、社会の課題に気付かせ、自らが課題を解決していこうとする児童の姿に「人間力」「社会力」の高まりを感じる。



写真18(集中してノートに自分の考えをまとめる。) 写真19(メモやイラストで工夫して誰が見ても見やすいノート。)

3 おわりに～社会科好きな子供に

この研究を通して、児童の主体性が伸びてきていることを感じる。特に、生活をよりよくしたい、地域に貢献したい、社会に協力したい、という前向きな考えや発言が見られるようになった。子供は素直である。正しいことを学べば、それを実践したくなる。『水を大切にすることを家族に伝えた』『伊奈氏の史跡を見に行き、親に説明してあげた』『ダムを見学して、ダムカードをもらってきた』など、喜んで報告してくる。

「授業で学んだことを誰かに伝えたり広めたりする」そういう児童の姿は、まさしく社会参画の第一歩であると感じる。社会科が好きな子供は、学習内容を実践してくれる。「子供の人間力・社会力の育成」を目指し、さらなる次のステップを探っていきたい。